

KR18-12C 南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト 海域津波履歴研究

○金松敏也（海洋研究開発機構），池原 研・味岡 拓（産総研）

「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」の海域津波履歴研究は、東海沖から八重山諸島沖にかけて、海底堆積物から津波・地震履歴に関する地質学的証拠を検出分析することにより、津波・地震履歴を明らかにすることを目的としている。今年度は、九州東方沖の海域津波履歴研究のため、「かいいい」による海底地質調査 KR18-12C を実施した。主に大淀海盆、宮崎沖大陸棚縁辺で調査した（図1）。本海域の先行研究は少なく情報が十分でないため、サブボトムプロファイラー、海底地形調査により地層の発達状況を詳しく調査して、ピストンコーラーによる地層採取を行った。大淀海盆は海盆の形状から北部と南部に区分でき、サブボトムプロファイラーでは 2-3 メートルの層厚の 2 枚の透明層が確認された。採取された 4 本のコアはおおよそ同様の岩相を示し、生物擾乱を受けたシルト層が主体で、2-3 層の薄い粗粒シルト層が挟在した。最下部には再堆積した火山灰層が確認された。

宮崎沖大陸棚縁辺では、斜面の麓に沿って堆積層が分布していることがサブボトムプロファイラーで分かった。成層した地層は PC05 地点（図1）で最も厚く、南北に薄くなる。採取されたコアは上方細粒化を示す粗粒層を頻繁に共在する。さらに北の海底谷の出口周辺と、日向海盆で採泥を実施した。岩相は生物擾乱を受けたシルト層が主体で、数枚の粗粒シルト層が挟在し、最下部には再堆積した火山灰層が挟在する。本航海を通じて 9 本の柱状試料を取得したが、ほとんどのコアの 3m 程度の深度に、厚い火山灰層の挟在が確認された。またこの海域で頻繁に砂層が挟在する場所がごく限られている事が分かった。今後、分析を実施し砂層に頻度を明らかにし、地震履歴を考察する。

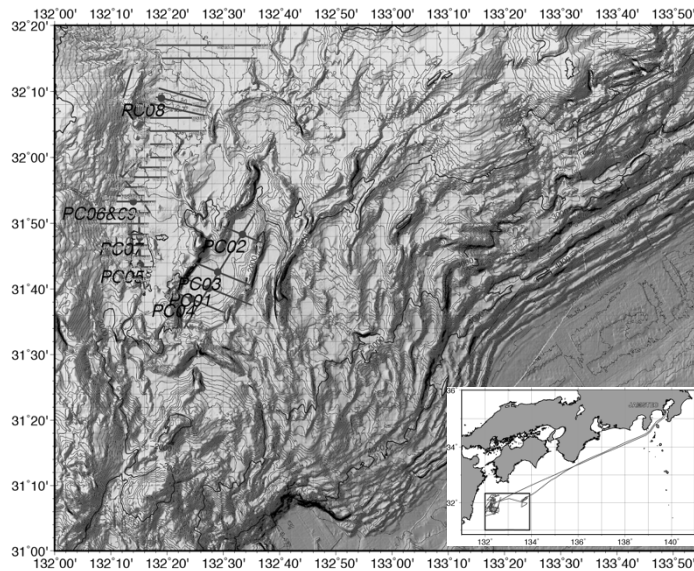


図1 KR18-12C 調査海域: 灰色線: SBP および MBES 測線, 灰色丸: 採泥点